

修士論文要旨

宗教者による社会福祉活動の可能性

西 池 深 音

目 次

序 論

本 論

第一章 現代日本社会における社会福祉制度

第一節 英国社会福祉制度の源流

第二節 戦後以降の日本における社会福祉政策の動向

第二章 宗教者による社会福祉活動とその意義

第一節 仏教各宗派による社会福祉活動

第二節 浄土真宗における社会実践の基盤

第一項 仏教の根本教理

第二項 親鸞における凡夫の自覚

第三項 親鸞における信と実践

第四項 大悲に支えられた社会福祉活動

第三章 社会福祉活動における臨床宗教師の意義と可能性

第一節 臨床宗教師の目的と姿勢

第二節 スピリチュアルケアと宗教的ケア

第三節 臨床宗教師の特徴

第四節 社会福祉活動における意義と可能性

第四章 宗教を背景とした社会福祉施設における臨床研究

第一節 社会福祉法人 光輪会

第二節 社会福祉法人認可とISO9001取得

第三節 複合的社会福祉サービス

第四節 寺院の隣で行われる社会福祉サービス

第五節 臨床研究より得た知見

結 論

参考文献

参考論文

序 論

現代の日本社会には、高齢化や孤独死、自死自殺者の増加、餓死者の発生など、様々な社会問題がある。また、2011年3月11日には東日本大震災によって甚大な被害がもたらされた。それらの社会問題や災害の中には、悩み苦しむ人がある。その苦悩に対する社会の働きのひとつが「社会福祉」であり、そのための具体的な活動が「社会福祉活動」である。では、宗教者が、以上のような社会福祉活動を行う意義はあるのだろうか。また、行った場合、どのような可能性があるのだろうか。

本 論

第一章では、現代日本における社会福祉政策について考察する。その成立過程を、その基となったとされるイギリスにおける社会保障制度の成立過程まで遡り、歴史的視点から考察した。イギリスにおける社会保障制度の始まりは、貧困者に対する救貧政策である。しかしその中心的目的是、苦悩を抱える人の力になるためではなく、経済の発展と治安維持であった。それらを阻害する「モノ」としての貧困者に対する、「対策」としての救貧政策であった。そこから見てきたことは、対象である「人」を物格化しているという問題点である。対して、一人ひとりに命の尊厳を見る宗教者の活動が果たした役割は大きい。国家の政策では苦しみから抜け出せないどころか、より苦しみが強くなってしまような状況の中で苦しむ人の力となったのが、宗教的精神を基とする民間団体であった。また、そのような団体や宗教者などの働きかけにより、全ての国民生活を国家が保障する社会保障制度が成立したのである。

戦後の日本における社会福祉政策の動向からは、その政策が経済の発展を優先したものであったことがわかる。そこには、「地域での支えあいを生かす」「自己選択を尊重し自立を支援する」としながらも、政府の支出削減の意図が見え隠れする。そして以上の事柄が制度化された政策の中からは、見落とされる、見捨てられる視点が多くある。そのような問題に対して、宗教は、社会の状況を一步離れた視点から見ている。そのことによって、見落とされてしまう、または見捨てられてしまうところを指摘している。また、そこで苦悩を抱える人に対し、アプローチすることのできる力を宗教者による社会福祉活動は持っている。そこにこそ、宗教者が社会福祉活動を行っていく意義と可能性があると考ええる。

第二章では、宗教者が社会福祉活動を行う意義について考察する。第一項では、明治から戦前における仏教各宗派の活動を批判的に考察した。そこからは、本来苦悩を抱える人の力となることが目的であり、結果として社会貢献になっていた活動が、いつしか仏教界での混乱などの要因により、自ら（寺院・教団）をまもるための社会・国家に対する貢献活動への目的の転

化がみられる。また、同時期に国家は戦争を推し進めていった。そこから仏教各宗派は社会・国家に迎合し、利用され、戦争に加担していった。社会的活動とは、社会に迎合したならば、人を苦しめ命を奪うことを是としてしまう危険性をはらんでいるのである。宗教者による社会福祉活動とは、世俗社会から離れた視点から社会を見ることができるところにその意義がある。社会に迎合してしまえば、その意義は失われるのである。

また第二項では、浄土真宗の教えから社会实践の基盤を考察する。「(社会的活動とは) 他力の信心に反する自力の行である」とその行動を否定する解釈もあるが、他力の教えとは、ただ仏の救いにまかせて待つだけの教えなのか。浄土真宗の教えとは、阿弥陀仏の救いにより浄土へ往生し成仏する道を顕かにした教えであり、その因とは信心である。信心とは聞くことである。何を聞くのかといえは「仏願の生起本末」を聞くことである。それは、迷い苦しみの中に沈み、自分の力では抜け出せない者がいることを知ったところに仏は願いを起こし、その迷い苦しむ者を救わんと働きかけていることである。つまりそれは、苦しむ衆生を智見した仏の起こす慈悲の心である。その仏の慈悲によって私たちは救われるのである。そして、この仏の慈悲の心をうけとっていくところに他者の苦悩に向き合い、その苦悩をやわらげたいという利他の心が生まれるといえるだろう。他力の教えとは、実践活動を否定するものではなく、実践活動へと突き動かす教えなのである。それは苦悩を抱える人一人ひとりのその苦悩に共感し、そこから共に抜け出したいという思いからの実践活動である。そこには、漏れたり見捨てられたりする人はいない。またその共感から、その人が何にどのように悩み苦しんでいるかを受け取り、その苦悩に対して「本当に」力になることのできる方策を問うことができるのである。

しかしその行動は、凡夫の行動であるがゆえに、完全なものではない。ゆえに仏の教えを中心に置き、常にその行動を仏の教えに問い直していかなければならないのである。それを抜きにして、社会(国家)の要請にただ迎合したならば、先に述べたように、戦争に加担した時のような過ちを犯しかねず、また宗教が宗教である存在意義を見失いかねないのである。常にわが身わが行動を批判的に問い直しつつ実践活動を考えなければならない。

第三章では「臨床宗教師」について述べる。この臨床宗教師研修には、筆者自身が実際に参加し学んだ。そこから、臨床宗教師とは何なのかを考察し、そこから臨床宗教師における社会福祉活動の意義を考察する。臨床宗教師研修とは、東日本大震災において宗教者等の様々な立場の者が連携して行った支援活動を起点につくられたものである。そして臨床宗教師とは、日本的チャプレンとして、公共空間で布教を目的とせずスピリチュアルケア、宗教的ケアの提供を目的とする宗教者である。スピリチュアルケアとは、生の危機に直面し、その人の生きる意味や目的、力、希望が見出せなくなったとき、時には超越的存在を仮定してそれを探す援助活動である。また、宗教的ケアとはそれを特定の宗教宗派の教義や儀礼によっておこなうも

のである。そして社会福祉活動とは人の抱える苦悩に向き合い、力になろうとする活動である。人の抱える苦悩とは、決して物質的なものだけではない。スピリチュアルな苦悩を抱えたり、他の苦悩として発露されたとしてもその根源にスピリチュアルペインが存在する場合がある。そのような苦悩に向き合うことができるのが「臨床宗教師」である。以上のことは、苦悩を抱える人に対し力になろうとする社会福祉活動にとって、重要な意義をもつと考える。また、その中でも特に「宗教的ケア」は、宗教者にしかできないことであるため、ここにも宗教者が社会福祉活動を行う意義と可能性があると考える。また、臨床宗教師研修では、苦悩を抱える人に向き合う際、その苦悩を「聴く」姿勢や、他宗教宗派や諸機関との連携などの重要な知見が得られた。それは、社会福祉活動を行う際にも重要な意義を持つものであると考える。

第四章では、以上のことを実際の現場に用いた場合、どのように生かせるか、またどのような結果が得られるかを臨床研究から考察した。社会福祉法人光輪会では、宗教の精神が宗教者だけでなく、スタッフ全員に共有されていた。そのことによりスタッフ全員が、苦悩を抱える人一人ひとりの力になることを目的とする社会福祉サービスが提供されていると感じた。また、その精神はスタッフだけにとどまらず、利用者やその家族にまで伝わる活動がなされていた。それにより、感謝し共感し支えあう心を育み、生きる意味を見出すこと、また死後の不安による苦悩の解消にもつながっていた。そしてそれを支えるのが、複合的に行われるサービスである。それらのことは、宗教者による活動であるがゆえのことであると考える。そして、そこにこそ宗教者による社会福祉活動の意義と可能性があると考える。

結 論

宗教者による社会福祉活動において重要なのは、その教えを中心とする目的を、はっきりと持つことである。そのことによって、苦悩を抱える人一人ひとりに向き合い、力になろうとする活動を行うことのできる、可能性があると考える。またその活動が、施設や団体において展開される場合、そこで共に活動する者にも、その精神や目的を共有することができたならば、同じ効果が得られるものと考えられる。そして、宗教者にしかこたえることのできない苦悩に対しても向き合う、つまり「宗教的ケア」を行うことのできる可能性を持っているのである。宗教者による社会福祉活動には、以上のような可能性があると私は考える。今後の宗教者による実践活動に期待したい。

参考文献

- 芹川博通『環境・福祉・経済倫理と仏教』ミネルヴァ書房 2002
 末本文美士『浄土思想論』春秋社 2013
 川北稔『イギリスの近代史』ミネルヴァ書房 1986

- 金子光一『社会福祉のあゆみ』有斐閣 2005
 鈴木幸雄『現代の社会福祉』中央法規出版 2012
 守屋茂『仏教社会事業の研究』法蔵館 1971
 北川清一・遠藤興一編著『社会福祉の理解』ミネルヴァ書房 2008
 菊池正治編著『日本社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房 2003
 池田敬正『現代社会福祉の基礎構造』法律文化社 1999
 中垣昌美『社会福祉学の基礎』さんえい出版 1996
 厚生省社会・援護局企画課監修『社会福祉基礎構造改革の実現に向けて』中央法規 1998
 龍谷大学人間・科学・宗教ORC『仏教社会福祉の可能性』法蔵館 2012
 中西直樹他『仏教社会事業資料集成』第一巻 不二出版 2011
 信楽峻磨『真宗の大意』法蔵館 2000
 村上速水『親鸞教義とその背景』永田文昌堂 1987
 中村元訳『ブッダ 神々との対話』岩波文庫 1986
 大谷光真『愚の力』文藝春秋社 2009
 窪寺俊之監修 谷山洋三他著『スピリチュアルケアの根底にあるもの』遊戯社 2012
 窪寺俊之『スピリチュアルケア学概説』三輪書店 2008
 窪寺俊之『スピリチュアルケア入門』三輪書店 2000
 柏木哲夫『ターミナルケアとホスピス』大阪大学出版会 2001

参考論文

- 長崎陽子「『仏教社会福祉』と『仏教福祉』のあいだ」『人間・科学・宗教ORC「仏教生命観に基づく人間科学の総合研究」研究成果 2002年度報告書』2002
 田宮仁「仏教福祉学の体系化に関する一試論」『佛教社会事業研究所年報』3 1986
 名和月之助「感化事業と仏教」『四天王寺国際仏教大学紀要』44 2007
 井上友一「自治訓練の方法（講演）」（明治42年）『地方改良事業講演集（上）』1985
 洗建「宗教と公益」『宗教法 第30号』2011
 信楽峻磨「戦時教学における真俗二諦論」『日本の宗教と文化』1989
 鍋島直樹「仏教生命観の特徴—縁起思想の意義」『真宗学』109・110 2004
 打本弘祐「スピリチュアルケアの諸相（1）」『桃山学院大学社会学論集』44 2010
 谷山洋三「仏教福祉学のキーワードを探る その1・福田」『仏教社会福祉学会年報』33 2002
 谷山洋三「仏教福祉学のキーワードを探る その2・苦」『仏教社会福祉学会年報』34 2003
 谷山洋三「スピリチュアルケアをこう考える」『緩和ケア』VOL. 19 NO. 1 2009
 トマス・ジョン・ヘイスティング「キリスト教の神学者からの願い」『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』第4号 2013
 高橋原「東北大学における「臨床宗教師」養成の試み」『国際宗教研究所ニュースレター』No. 75 2012